

ばいよう

貝葉が伝える仏教ポー・カレン文字

加藤 昌彦 大阪外国語大学助教授

「カレン人」と言えば・・・

ビルマ（ミャンマー）とタイの国境にまたがる山岳地帯からビルマ南部一帯の平野にかけて、カレン人と呼ばれる少数民族が居住しています。ビルマにはおそらく300万人以上が暮らすと言われ、ビルマの少数民族の中ではシャン人に次ぐ人口を擁しています。タイにも30万人以上が住んでいて、タイの少数民族の中ではかなり多い部類に属します。両国に住むカレン人の人口を合わせると、400万人近くにのぼる可能性があり、「少数民族」という呼び方はあまりふさわしくないようにも感じられます。もちろん、ビルマやタイといったその国の主要民族から見て少数という意味なのですが、人口が多いだけあって、ビルマやタイに行けば、実際にカレン人に会う機会も少なくありません。

カレン人に対して日本人が抱いているイメージは、えてして画一的です。東南アジアに関心のある人に、私がカレン人の言語を研究しているということを言うと、返ってくる反応は、だいたい次の二つのどちらかであることが多いようです。ひとつは、「確かキリスト教徒が多くて、仏教徒のビルマ政府にたてついているんですよね」というような、ビルマ政府に反抗するキリスト教徒というイメージでとらえるもの。もうひとつは、「ああ、あの山岳民族ですね。

村に泊まったことがありますよ」というような、素朴な山岳民族というイメージでとらえるもの。このようなとらえ方は決して間違っていない。しかし、カレンという民族を描き出す言葉として十分であるとは言えません。

ビルマに住むカレン人の一部は、ビルマ独立直後の1949年以降、尖鋭的な反政府武力闘争を行ってきました。その主導権を握ってきたのは、キリスト教徒のカレン人たちです。このことが、ビルマ政府に反抗するキリスト教徒カレン人というイメージを作り上げました。19世紀の初頭、アメリカからビルマへ派遣されたバプティスト派の宣教師たちがカレン人に宣教を始め、その後徐々にキリスト教徒が増えていきました。反ビルマ感情が尖鋭化した原因としてキリスト教化を挙げる向きもありません。研究者によっては、宣教師の布教活動そのものを、民族間関係が悪化した直接的な原因として糾弾します。しかし私は、元からあった反ビルマ感情の結果としてキリスト教への入信者が増えていったと見ることも考えています。もとより、キリスト教徒カレン人にとっての拠り所であるキリスト教の活動を糾弾することは、彼らそのものの存在を否定することにもつながりかねないのであり、そのような言説は慎むべきでしょう。

一方、ビルマとタイの国境地帯に広がる山岳地帯に住むカレン人には、近代文明から距離を置いた、昔ながらの素朴な生活を続けている人たちが少なくありません。この人たちは主に、先祖から受け継がれた神や、自然物に宿る精霊を信仰しています。北タイではこのような少数民族の存在そのものが観光資源となっており、古都チェンマイなどを拠点に山岳地帯の少数民族の村々を巡るツアーが観光客に提供されています。素朴な山岳民族というもう一つのカレン人のイメージは、こうしたツアーの訪問先に住むカレン人から得られるイメージです。

平地の仏教徒カレンたち

さて、この二つのイメージからは、ビルマの平地に住むカレン人のイメージがすっぱりと抜け落ちてしまっています。特に、キリスト教徒でもなく、精霊のみを信仰しているのでもない、仏教徒のカレン人のことはすっかり忘れ去られてしまったかのようです。カレン人を語る上で、平地に住む仏教徒カレン人の存在は重要です。なぜなら、カレン人の中でこの人たちがかなりの数を占めるからです。ビルマでは圧倒的多数のカレン人が都市部を含む平地に住んでおり、なおかつ、正確な統計はありませんが、平地に住むカレン人の過半は仏教徒だと考えられています。

このような仏教徒カレンのうち、カレン州に住むポー・カレンの人々は、特筆すべき存在です。なぜなら、この人たちは自分達で文字を作り、その文字を使った前々世紀からの古い文献を持つからです。

狭義^{*1}のカレン人には、スゴー・カレン (Sgaw Karen) とポー・カレン (Pwo Karen) という二つの大集団があります。カレン州の州都バアン (Hpa-an) は、ポー・カレンの多い地域であり、ポー・カレン語がこの周辺に住むカレン系諸民族の共通語的役割を果たすことがあります。スゴー・カレン人や、同じカレン系の一民族であるバオ人も、バアン周辺に住む人はポー・カレン語が理解できる場合が多いのです。

この地のポー・カレン人はほとんどが仏教徒です。伝説によれば、ビルマのパガン朝時代 (11-14世紀) に、モン^{*2} (Mon) の都タトンという町でモン人の王に仕えていたブーダイコーという人が、大蔵経をポー・カレン語に訳したといわれます。また、18世紀の後半ごろ、ブーターマイというカレン人僧侶が、この地に仏教を広め、定着させたと言い伝えられています。でも、これらは伝説に近いものであり、ポー・カレンがいつ仏教を本格的に受容したのか



*1 カレン系言語を話す民族は30種類以上存在すると言われ、ビルマの七大大少数民族のひとつであるカヤー族、首に金属の輪をはめて首を長くする習慣のあるバダウン族、独特の黒い衣装で有名なバオ族といった民族も含まれる。「カレン」という民族名は、最も広義にはこれらカレン系言語を話す民族すべてを含む。

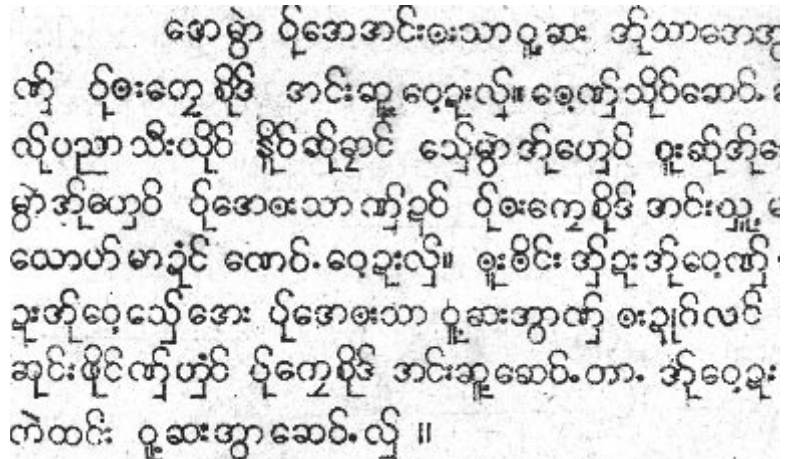
について正確なことは分かっていません。

少なくともパアン周辺のポー・カレンについては、仏教をビルマ人からではなくモン人から受容したと考えられます。モン人というのは、かつてこの周辺でいくつかの王朝文化を花開かせたモン・クメール系の民族です。モン人から仏教を受容したことは、ポー・カレン語の仏教にまつわる語彙がモン語からの借用語であることが多いということから推測できます。例えば、ポー・カレン語で僧院のことを「ピャー」と言います。これはモン語「ペー(ア)」の借用語です。

ばいよう
仏教ポー・カレン文字と貝葉

モン人から仏教を受け入れる過程で、かつてのポー・カレンの人々は、モン文字を改変してポー・カレン語を表記することを考え出しました。これが、私が「仏教ポー・カレン文字」と呼んでいる文字の始まりです。この文字がいつごろできあがったかは分かっていません。そもそも最初は試行錯誤が続いたでしょうし、どの段階をもってできあがったと言えるのかも難しい問題です。カレン州ではこの文字は単に「ポー・カレン文字」と呼ばれています。一方で、アメリカ人宣教師が、ポー・カレン語の聖書を作るために、1840年代頃にポー・カレン語を書き表す文字を考案します。私が「キリスト教ポー・カレン文字」と呼んでいる文字です。ポー・カレンの仏教徒は、仏教ポー・カレン文字がキリスト教ポー・カレン文字よりも古くから存在していたと信じています。確かにその可能性は否定できません。さらに、カレン系文字の中で一番古い文字としてよく言及される、1830年代に宣教師によって作られたキリスト教スゴー・カレン文字よりも、仏教ポー・カレン文字のほうが古い可能性があります。

ビルマ人(ビルマ族)の歴史研究者ウー・ボンミン(U Phon Myint)は、1975年に『仏教徒ポー・カレンの貝葉の歴史』という本を出しました。この本は、ポー・カレン語で書かれた貝葉についてのおそらく唯一の研究書です。すぐれて実証的な良書ですが、ビルマ語で書かれているということもあって、ビルマ以外の国ではあまり知られていません。貝葉というのは、ヤシ科の植物の葉を乾燥させ、それに鉄筆で文字を刻み込



仏教ポー・カレン文字(教科書掲載の文章の一節「立派な人間になりたいければ努力しなければならない」という内容)

んだもので、東南アジアやインドでは古くからこのような形で様々な文書が記されてきました。あまり知られていませんが、ポー・カレンには貝葉がたくさんあるので、ウー・ボンミンはこの本の中で、貝葉を中心とする仏教ポー・カレン文字の文書を70編余り紹介し、解題を付けています。うち50編以上は仏教に関する内容を持つものです。最初からポー・カレン語で書かれたものと、モン語やビルマ語やパーリ語から翻訳されたものがあり、モン語から訳されたものが最も多いようです。これらは、主に、パアン周辺の20か所近くの僧院で蒐集されました。彼がこの本の中で扱った文書のうち最古の文献は、1851年に書かれたとされる、モン語から翻訳された仏教説話です。ウー・ボンミンが蒐集したポー・カレン語貝葉は、もちろん、これまで書き記された貝葉のうちの一部に過ぎ

ません。ひょっとすると、これより古い文献が見つかる可能性もあります。しかし、高温多湿の気候の中で貝葉は朽ちやすいため、こうした研究は時間が経てば経つほど難しくなっていくでしょう。私も、パアン近郊の数か所の僧院やパアンにあるカレン文化博物館で、貝葉の一部を見せてもらいましたが、保存状態は決して良くありません。カレン州周辺のポー・カレンの人々は、自分達に貝葉があることを誇りに思っています。また、貝葉に使われた文字を使って自分達の言語を書き表すことができることに強い誇りを持っています。私は、この地域のポー・カレンに、他の地域に住むカレン人よりも強い矜持のようなものを感じ取ることがしばしばありますが、これは彼らが固有の文字を持っていることと関係があるかもしれません。



仏教ポー・カレン文字の貝葉

*2 モン人は現在のビルマやタイにいくつかの王朝を開いた。タトンに都を置くタトン朝は紀元前から存在したとも言われ、1057年に、ビルマ人最初の統一王朝であるバガン朝の王アナーヤターによって攻略されたと伝えられる。

言語文化を守る動き

実を言うと、貝葉に刻まれている仏教ポー・カレン文字は、発音との関係で見ると体系性に欠ける部分を有していました。特に、「声調」と呼ばれる、声の上がり下がりや高低を記す方式に欠陥がありました。モン語には声調がないため、モン文字で声調を表すのには困難を伴うのです。これを克服するため、1960年代ごろからパアンに住むポー・カレンの有志たちが文字の整備を始め、その成果を1975年に出版されたカレン語の教科書に盛り込みました。この教科書は、現在、仏教ポー・カレン文字でポー・カレン語を書く際の規範となっています。最近では、整備された仏教ポー・カレン文字で書かれた出版物も増えてきました。雑誌も何種類か不定期に出版されています。

近年、少数民族の言語を消滅の危機から守ろうとする動きが世界中で活発になっています。ポー・カレン語やスゴ・カレン語の場合、人口が多いため、消滅する危険性はそれほど高くありません。しかし、それにもかかわらず、自分達の言語文化がビルマ語の勢力におされて衰退しつつあるという危機意識を持っているカレン人は少なくありません。パアンに住むポー・カレンの場合、毎年4月の暑期休みに、カレン文字の合宿講習会を催しています。参加者は子供達を中心に100人を超えます。カレン州に住む人たちは主に文字を学習する目的でこの講習会に参加しますが、ヤンゴンな



暑期休みに行われる仏教ポー・カレン文字講習会

どの都市に住んでいるポー・カレンの若者の中にはビルマ語しか話せない人も多いため、このような人がカレン語そのものを学習するために参加する場合があります。この合宿ではポー・カレンの伝統的な歌謡や民族舞踊なども習います。

合宿講習以外の文字を学ぶ場としては僧院があります。少年僧たちに仏教ポー・カレン文字を教えている僧院はかなりの数にのぼるようです。私も、少年僧たちに混じって毎日ポー・カレン語を学んだことがあります。教えている僧になぜポー・カレン文字を教えるのかを問うたところ、やはり自分達の言語文化の衰退に危機意識を持っているということを書いていました。

パアン周辺に住むポー・カレンは、歌や踊りがうまく、即興で歌を作ることのできる名人がたくさんいます。男と女が歌で愛を語らう歌垣という行事もあります。また、

ドンイェインと呼ばれるポー・カレンの集団舞踊は、ビルマにおけるカレン人全体の文化的シンボルにもなっています。自分達の作った文字を持っているということ以外に、こうした独特の文化を持っていることも、この地のポー・カレンの特色です。

以上のようなことを見ると、カレン人について語るとき、パアン周辺に住むポー・カレンのような平地の仏教徒カレン人の存在を決して無視することはできないということが分かります。

かとうあつひこ

1966年栃木県生まれ。東京外国語大学でビルマ語を、東京大学および大学院で言語学を専攻。1992年から95年までヤンゴン外国語学院に留学。国立民族学博物館助手を経て大阪外国語大学助教授。ビルマ語の研究と平行して、カレン系諸言語の研究を行っている。ポー・カレン語文法を執筆中。主な著書・論文に『エクスプレス ビルマ語』(白水社)、『Pwo Karen』(The Sino-Tibetan Languages, Routledge) などがある。



カレンの文化的象徴にもなっているポー・カレンの集団舞踊ドンイェイン